

# 高等学校学習指導要領と 英語資格・検定試験との関係について

文部科学省 初等中等教育局

# 学習指導要領について

- 学校教育の水準を確保するために、学校教育法及び同施行規則の規定に基づいて、文部科学大臣が教育課程の基準として示すもの。

※児童生徒が目標を達成することを義務付けるものではなく、各学校が、教育基本法、学校教育法、学習指導要領に掲げる目標を達成するよう教育を行う必要があることを示している。

- 各学校が、児童生徒の学習状況などその実態等に応じて、学習指導要領に示していない内容を加えて指導することも可能である。(学習指導要領の「基準性」と呼ばれている)
- 学習指導要領に示す教科・科目等の目標、内容、教育課程編成上の留意点等は中核的な事項にとどめられ、大綱的なものとなっている。
- 現行の高等学校学習指導要領は、平成21年3月に告示。  
平成25年度の入学者から適用されている。
- 令和4年度の入学者からは、平成30年3月に告示した新学習指導要領が適用。  
(令和4年度に入学した生徒は、令和6年度(2024年度)中に大学入学者選抜を受けることになる)



# 現行学習指導要領における外国語科の目標・内容等の規定

参考資料p9-16

## 目標・内容

- 「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の4技能を使って、情報や考えなどを的確に理解したり伝えたりするコミュニケーション能力を育てることを目標としている。
- 具体的な言語の使用場面を想定して、考えや情報を英語で伝え合う「言語活動」を通して指導する。
- 「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の領域別の言語活動だけでなく、聞いたり読んだりしたことを踏まえて、自らの考えなどについて話したり書いたりするなどの統合的な言語活動を重視。

## 科目構成

- 4技能を総合的に指導する「コミュニケーション英語Ⅰ」(3単位)を必履修科目とする。
- 科目が上がる(コミュニケーション英語Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ、英語表現Ⅰ→Ⅱ)につれて、言語活動が高度なものとなり、取り扱う語彙数が増える。
- 各科目ごとに語彙数の目安を示しているが、上限ではなく、取り扱う語の指定もしていない。
- 文法事項については、すべて「コミュニケーション英語Ⅰ」で取り扱うこととなっている。
- 「言語の使用場面」には、中学校では「家庭での生活」「学校での学習や活動」「地域の行事」が設定されているが、高等学校では「地域での活動」「職場での活動」を新たに設定。

## 指導計画及び内容の取扱いなど

- 生徒が英語に触れる機会を増やし、授業を本物のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする(ただし、生徒の実態に応じた英語を使用する)
- 各高等学校において、4技能ごとの学習到達目標を設定することを進めている。生徒と目標を共有し、学習評価にも活用するため、「何を教えるか」ではなく「何ができるか」(CAN-DO)という形で示す。

※平成30年12月時点で、9割以上の高等学校で、CAN-DO形式の学習到達目標を設定

※新学習指導要領では、学習指導要領の目標自体を、「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り、発表]」「書くこと」の5つの領域別に「何ができるか」という形で示している。

民間の資格・検定試験の活用にあたっては、学習指導要領に基づき実施される高等学校の英語教育の成果として、英語の能力がどの程度身につけているのか、適切に評価される仕組みとなることが必要であり、高等学校学習指導要領と整合性が図られていなければならない。

その上で、一般的に高等学校の英語教育で指導される内容はCEFRにおけるA1～B1レベルであるが、各高等学校が設定する英語教育の目標・教育課程や生徒が目指す進路などに応じて生徒の英語能力の実態は様々であり、入学者選抜において求める英語能力も大学ごとに様々であることから、生徒の英語能力をより幅広く測定できるようにするとともに、より多くの大学の入学者選抜に資するよう、活用できる資格・検定試験の選択肢を多くしておくことが重要である。

## 1. 確認のポイント

資格・検定試験が学習指導要領と整合性があるかどうかについては、

- (1) 学習指導要領が育成を目指す能力と、各資格・検定試験において評価する能力に整合性があるか、
- (2) 学習指導要領に基づく指導において取り上げられる言語使用の目的や場面と、各資格・検定試験が狙いとする言語使用の目的や場面に整合性があるか、

などを中心に確認。

## 2. 確認のプロセス

### (1) 各資格・検定試験実施団体による確認

各資格・検定試験実施団体において、

- ①試験の目的・出題方針、
- ②4技能ごとの測定しようとする能力、
- ③試験の各問題と学習指導要領の関連等

について記載した資料と実際の試験問題を文科省に提出。

### (2) 有識者及び文部科学省職員による確認

(1) を踏まえ、

- ①英語教育の専門家
- ②高等学校英語教育の教育課程の基準の専門家
- ③英語教育を所管する文部科学省職員

が、実際の試験問題も確認した上で、整合性があることを確認。

【育成・評価する能力】

高等学校学習指導要領では、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能を総合的に育成することとしており、4技能を総合的に評価しようとする資格・検定試験と、育成・評価する能力の方向性は一致している。

【言語使用の目的や場面】

高等学校学習指導要領では、各学校が編成する教育課程の目的や目標に応じ、家庭での生活や学校での学習や活動、地域での活動、職場での活動など、多様な言語の使用場面を取り上げて指導することとしている。

各資格・検定試験が掲げる目的は、以下のようにそれぞれ多様であるが、いずれも学習指導要領が想定している言語の使用場面の範囲から外れるものではない。

ケンブリッジ英語検定	学習者が実生活のさまざまな状況において、コミュニケーションのために英語をどのように使うことができるかを評価する	TEAP TEAP CBT	EFL (外国語としての英語) 環境の大学における授業等で行う言語活動において英語を理解したり、考えを伝えたりすることが出来るかを評価する
実用英語検定	英語圏における社会生活 (日常・アカデミック・ビジネス) に必要な英語を理解し、使うことができるかを評価する	TOEFL iBT	高等教育機関において英語を用いて学業を修めるのに必要な英語力を有しているかを測ることを目的とする
GTEC	高校生が実際の使用場面 (ジェネラル・アカデミック) において必要とされる英語によるコミュニケーション力を、知識・技能を基礎とした上で、思考・判断・表現の力まで評価する	TOEIC L&R TOEIC S&W	和文英訳・英文和訳などの技術ではなく、身近な内容からビジネスまで幅広くどれだけ英語でコミュニケーションできるかを評価する
IELTS	英語を用いたコミュニケーションが必要な場所において、就学・就業するために必要な英語力があるかを評価する		

◆高等学校卒業時の英語能力について【語彙数や文法事項の範囲等と難易度】

高等学校卒業時には、36.4%の生徒がA2以上 (平成28年度) であり、政府としてはこれを50%まで引き上げることを目標としている。

【語彙数】

学習指導要領では、履修する科目に応じ2300～3000語程度 (新学習指導要領では4000～5000語程度) を扱うとされているが、これはあくまで下限であり、大学受験のためには4000語～5000語を履修させていることも多い。

【文法事項の範囲】

学習指導要領では、中学校・高等学校それぞれの段階で文法事項に関する学習を積み上げ、高等学校修了時まで現代の標準的な英語を活用するために必要な文法事項は学習できるように規定されており、申し込みのあった資格・検定試験においては現代の標準的な英語を文法事項の基本として取り扱っている。

※ なお、高等学校学習指導要領は、高等学校において学習する最低限の内容を定めているものであり、各高等学校が設定する英語教育の目標や教育課程は多様であることから、資格・検定試験の難易度が高いことをもって、ただちに学習指導要領との整合性がないとは言えない。

## 留意点・課題

- ・ 試験によって内容や形式の特色をもっており、難易度にも差がある。生徒が、自分自身の習熟度にあったもの、どのような英語力を伸ばしたいかという意向にあったものを適切に選べるよう、適切な情報提供が重要。  
→「英語4技能試験サイト」や高等教育局が作成していたポータルサイトなどで情報提供を行ってきた。
- ・ 学習指導要領と整合性があるとは言っても、資格・検定試験で高得点を取るための小手先の対策を授業で行うことは適切ではない。また、学校が行う学習評価を代替するものでもない。  
→学習指導要領に沿った授業を行うことで、結果として、資格・検定試験においても対応できる力が身に付くと考えられる。  
→資格・検定試験の結果を、教師が行う学習評価の補完材料として活用することが考えられるが、資格・検定試験の結果をそのまま平素の成績の評価とすることは適切ではない。各学校が、普段の授業や定期試験等でスピーキングテスト、ライティングテストも含めた学習評価を行い、生徒の学習改善、教師の指導改善につなげることが重要。
- ・ 学習指導要領との整合性に問題がないかという最低限の条件の検証を行ったもの。各試験においては、出題内容や方法などを一層改善・向上することを期待。
- ・ 英語教育の在り方に関する各種会議においては、資格・検定試験と学習指導要領の関係だけでなく、大学の個別選抜の問題と学習指導要領の整合性も課題であると指摘されてきたところ。  
(例) 大学によって異なるが、例えば、学習指導要領では4技能を求めているのに、「読むこと」1技能しか評価できていない、文法等の知識に偏っている、文脈無く不自然な英文和訳・和文英訳をさせている、工夫されてはいるものの設問が「何の力を測ろうとしているのか」が受験生にはわからない出題があるなどの指摘 →参考資料p17-18



文部科学省YouTube公式チャンネル(MEXT Channel) 外国語教育はこう変わる！より



## 高等学校の外国語教育から見た高大接続改革の意義

- 高等学校教育は、大学に進学するか否かにかかわらず、生徒が卒業後、社会で求められる資質・能力を育てることとしてきた。
- これまでの取組により、入試のためではなく、各学校が生徒に身に付けさせたい力を育てることを目指し、学習指導要領を踏まえた授業の改善を進めている高校は増えつつある。 →参考資料 (事例) pp15-16, (データ) pp25-28
- しかし現実には、大学入試が、高校の授業改善に、影響を与えてきたことは否定できない。(例:学年が上がるにつれて授業や評価の改善状況が低下している。) →参考資料 pp26-27, 31-32
- 授業の中で培われた生徒の能力が、大学入学者選抜(個別選抜を含む)においても適切に評価されるよう、高大接続改革を進めることが必要。

關係資料①  
高等学校學習指導要領關係



# 高等学校外国語科 科目構成（新旧）

## 【現行】

高等学校学習指導要領  
（平成21年告示）  
平成25年度入学者より適用

教科等	科 目	標 準 単 位 数
外国語	コミュニケーション英語基礎	2
	<b>コミュニケーション英語Ⅰ</b>	<b>3</b>
	コミュニケーション英語Ⅱ	4
	コミュニケーション英語Ⅲ	4
	英語表現Ⅰ	2
	英語表現Ⅱ	4
	英語会話	2

## 【新】

高等学校学習指導要領  
（平成30年告示）  
令和4年度入学者より適用

教科等	科 目	標 準 単 位 数
外国語	<b>英語コミュニケーションⅠ</b>	<b>3</b>
	英語コミュニケーションⅡ	4
	英語コミュニケーションⅢ	4
	論 理 ・ 表 現 Ⅰ	2
	論 理 ・ 表 現 Ⅱ	2
	論 理 ・ 表 現 Ⅲ	2

（共通）

- ・**太字**は必修科目。単位数は2単位まで減じることができる。
- ・1単位時間は50分とし、35単位時間の授業を1単位として計算することを標準とする。
- ・生徒の実態等を考慮し、特に必要がある場合には、標準単位数の標準の限度を超えて単位数を増加して配当することができる。

# 現行学習指導要領における目標、内容等の記載

## <教科目標>

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

## <各科目の目標> (抄)

### 第2 コミュニケーション英語 I

#### 1 目標

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養う。

#### 2 内容

(1) 生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践するように具体的な言語の使用場面を設定して、次のような言語活動を英語で行う。

ア 事物に関する紹介や対話などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。

イ 説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。また、聞き手に伝わるように音読する。

ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。

エ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く。

(2) (1)に示す言語活動を効果的に行うために、次のような事項について指導するよう配慮するものとする。

ア リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたり話したりすること。

イ 内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら読んだり書いたりすること。

ウ 事実と意見などを区別して、理解したり伝えたりすること。

#### 3 内容の取扱い

(1) 中学校におけるコミュニケーション能力の基礎を養うための総合的な指導を踏まえ、聞いたことや読んだことを踏まえた上で話したり書いたりする言語活動を適切に取り入れながら、四つの領域の言語活動を有機的に関連付けつつ総合的に指導するものとする。

## <各科目に共通する内容>

- 1 英語に関する各科目の2の(1)に示す言語活動を行うに当たっては、例えば、次に示すような言語の使用場面や言語の働きの中から、各科目の目標を達成するのにふさわしいものを適宜取り上げ、有機的に組み合わせて活用する。

### [言語の使用場面の例]

#### a 特有の表現がよく使われる場面：

- ・ 買物・旅行・食事・電話での応答
- ・ 手紙や電子メールのやりとりなど

#### b 生徒の身近な暮らしや社会での暮らしにかかわる場面：

- ・ 家庭での生活・学校での学習や活動
- ・ 地域での活動・職場での活動など

#### c 多様な手段を通じて情報などを得る場面：

- ・ 本、新聞、雑誌などを読むこと
- ・ テレビや映画などを観ること
- ・ 情報通信ネットワークを活用し情報を得ることなど

### [言語の働きの例]

#### a コミュニケーションを円滑にする：

- ・ 相づちを打つ・聞き直す・繰り返す
- ・ 言い換える・話題を発展させる
- ・ 話題を変えるなど

#### b 気持ちを伝える：

- ・ 褒める・謝る・感謝する・望む
- ・ 驚く・心配するなど

#### c 情報を伝える：

- ・ 説明する・報告する・描写する
- ・ 理由を述べる・要約する・訂正するなど

#### d 考えや意図を伝える：

- ・ 申し出る・賛成する・反対する
- ・ 主張する・推論する・仮定するなど

#### e 相手の行動を促す：

- ・ 依頼する・誘う・許可する
- ・ 助言する・命令する・注意を引くなど

- 2 英語に関する各科目の2の(1)に示す言語活動を行うに当たっては、中学校学習指導要領第2章第9節第2の2の(3)及び次に示す言語材料の中から、それぞれの科目の目標を達成するのにふさわしいものを適宜用いて行わせる。その際、「コミュニケーション英語Ⅰ」においては、言語活動と効果的に関連付けながら、ウに掲げるすべての事項を適切に取り扱うものとする。

#### ア 語、連語及び慣用表現

##### (ア) 語

a 「コミュニケーション英語Ⅰ」にあつては、中学校で学習した語に**400語程度**の新語を加えた語

b 「コミュニケーション英語Ⅱ」にあつては、aに示す語に**700語程度**の新語を加えた語

c 「コミュニケーション英語Ⅲ」にあつては、bに示す語に**700語程度**の新語を加えた語

d 「コミュニケーション英語基礎」、「英語表現Ⅰ」、「英語表現Ⅱ」及び「英語会話」にあつては、生徒の学習負担を踏まえた適切な語

(イ) 連語及び慣用表現のうち、運用度の高いもの

イ 文構造のうち、運用度の高いもの

ウ 文法事項

(ア) 不定詞の用法 (イ) 関係代名詞の用法 (ウ) 関係副詞の用法  
(エ) 助動詞の用法 (オ) 代名詞のうち、itが名詞用法の句及び節を指すもの (カ) 動詞の時制など (キ) 仮定法 (ク) 分詞構文

# 新学習指導要領における4技能（5領域）別の目標

- 新学習指導要領では、小学校・中学校・高等学校の各段階において、「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]・[発表]」「書くこと」の5領域ごとに目標を設定。
- それぞれ「何ができるようになるか」(CAN-DO)という形式で目標を示すことにより、教師及び学習者の双方に、目指す姿を明確化している。

小学校学習指導要領（平成29年告示）は令和2年度から全面実施。中学校学習指導要領（同）は令和3年度、高等学校学習指導要領（平成30年告示）は令和4年度（入学者）から適用。

	小学校第3学年及び第4学年 外国語活動	小学校第5学年及び第6学年 外国語	中学校 外国語	高等学校 英語コミュニケーションⅠ (共通必修履修科目)
聞くこと	<p>ア ゆっくりはっきりと話された際に、自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞き取るようにする。</p> <p>イ ゆっくりはっきりと話された際に、身近で簡単な事柄に関する基本的な表現の意味が分かるようにする。</p> <p>ウ 文字の読み方が発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかが分かるようにする。</p>	<p>ア ゆっくりはっきりと話されれば、自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができるようにする。</p> <p>イ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、具体的な情報を聞き取ることができるようにする。</p> <p>ウ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、短い話の概要を捉えることができるようにする。</p>	<p>ア はっきりと話されれば、日常的な話題について、必要な情報を聞き取ることができるようにする。</p> <p>イ はっきりと話されれば、日常的な話題について、話の概要を捉えることができるようにする。</p> <p>ウ はっきりと話されれば、社会的な話題について、短い説明の要点を捉えることができるようにする。</p>	<p>ア 日常的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、多くの支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、話し手の意図を把握することができるようにする。</p> <p>イ 社会的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、多くの支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、概要や要点を目的に応じて捉えることができるようにする。</p>
読むこと		<p>ア 活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を発音することができるようにする。</p> <p>イ 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする。</p>	<p>ア 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取ることができるようにする。</p> <p>イ 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の概要を捉えることができるようにする。</p> <p>ウ 社会的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の要点を捉えることができるようにする。</p>	<p>ア 日常的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、多くの支援を活用すれば、必要な情報を読み取り、書き手の意図を把握することができるようにする。</p> <p>イ 社会的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、多くの支援を活用すれば、必要な情報を読み取り、概要や要点を目的に応じて捉えることができるようにする。</p>

話すこと  
[やり取り]

ア 基本的な表現を用いて挨拶、感謝、簡単な指示をしたり、それらに応じたりするようにする。

イ 自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うようにする。

ウ サポートを受けて、自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて質問をしたり質問に答えたりするようにする。

ア 基本的な表現を用いて指示、依頼をしたり、それらに応じたりすることができるようにする。

イ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする。

ウ 自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする。

ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。

イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする。

ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができるようにする。

ア 日常的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを話して伝え合うやり取りを続けることができるようにする。

イ 社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、聞いたことを読んだことを基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝え合うことができるようにする。

話すこと  
[発表]

ア 身の回りの物について、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。

イ 自分のことについて、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。

ウ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、人前で実物などを見せながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。

ア 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。

イ 自分のことについて、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。

ウ 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。

ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。

イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする。

ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。

ア 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝えることができるようにする。

イ 社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、聞いたことを読んだことを基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝えることができるようにする。

書くこと

ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。

イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。

ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて正確に書くことができるようにする。

イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができるようにする。

ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする。

ア 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して文章を書いて伝えることができるようにする。

イ 社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、聞いたことを読んだことを基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して文章を書いて伝えることができるようにする。

- ・学習指導要領を元に、各学校の学習到達目標を、各技能（領域）別に「CAN-DO」（～することができる）形式で設定している。全国の高等学校の95%で作成済み。
- ・CAN-DOをCEFRと対照させたり資格・検定試験の級・スコアと関連付けて示すことも行われている。

## CAN-DOリスト形式による学習到達目標の設定例（高等学校）

※ 観点別学習状況の評価における「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」及び「言語や文化についての知識・理解」の4つの観点のうち、「CAN-DOリスト」の形で学習到達目標は「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」について設定する。ただし、学習評価は4つの観点を総合して行う。

※ 本学習到達目標例は技能別に示してあるが、授業においては、4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成することに留意する。

### 【卒業時】

英語を通じて、場面や状況、背景、相手の表情や反応などを踏まえて、話し手や書き手の伝えたいことを的確に理解するとともに、自分が伝えたいことを適切に伝えることができる。

「外国語表現の能力」

「外国語理解の能力」

【第3学年】履修科目：「コミュニケーション英語Ⅲ」（4単位）及び「英語表現Ⅱ」（分割2単位）／主な教材：左記科目の教科書、教科書の内容に関連した別教材

話すこと		書くこと		聞くこと		読むこと	
学習到達目標	科目・評価	学習到達目標	科目・評価	学習到達目標	科目・評価	学習到達目標	科目・評価
<ul style="list-style-type: none"> <li>・聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどをまとめ、発表することができる。</li> <li>・発表されたものを聞いて、質問したり意見を述べたりすることができる。</li> <li>・多様な考え方ができる話題について、立場を決めて意見をまとめ、相手を説得するために意見を述べ合うことができる。</li> </ul>	<b>コミュ英Ⅲ</b> ・プレゼンテーション ・ディベート  <b>英語表現Ⅱ</b> ・ディベート ・プレゼンテーション ・インタビューテスト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主題を決め、様々な種類の文章を書くことができる。</li> <li>・文章の構成を考えながら書くことができる。</li> <li>・図表との関連を考えながら書くことができる。</li> <li>・書いた内容を読み返して、推敲することができる。</li> </ul>	<b>コミュ英Ⅲ</b> ・ライティングテスト ・定期考査  <b>英語表現Ⅱ</b> ・エッセーライティング ・定期考査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会的な話題や時事問題について話されている対話や討論などを聞いて、情報や考えなどの概要をとらえることができる。</li> <li>・社会的な話題や時事問題について話されている対話や討論などを聞いて、情報や考えなどの要点や詳細をとらえることができる。</li> </ul>	<b>コミュ英Ⅲ</b> ・リスニングテスト ・定期考査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会的な話題や時事問題について書かれている説明や評論などを速読して、情報や考えなどの概要をとらえることができる。</li> <li>・社会的な話題や時事問題について書かれている説明や評論などを精読して、情報や考えなどの要点や詳細をとらえることができる。</li> </ul>	<b>コミュ英Ⅲ</b> ・リーディングテスト ・定期考査

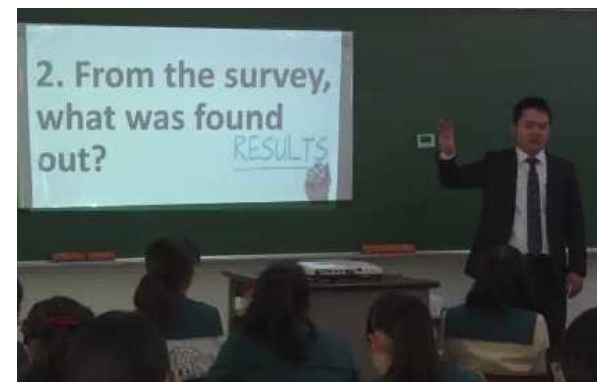
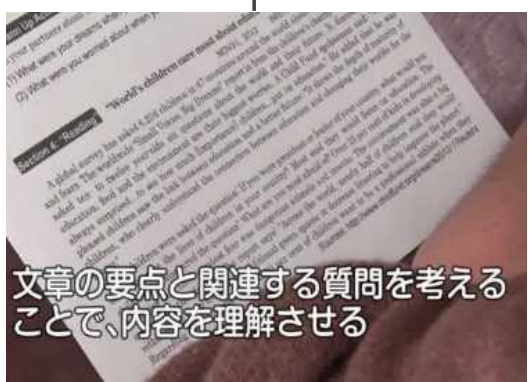
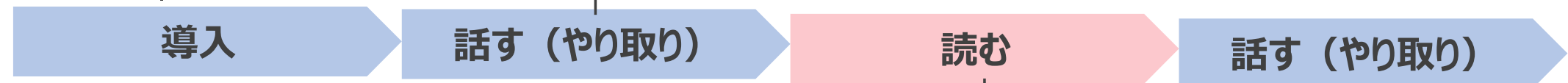
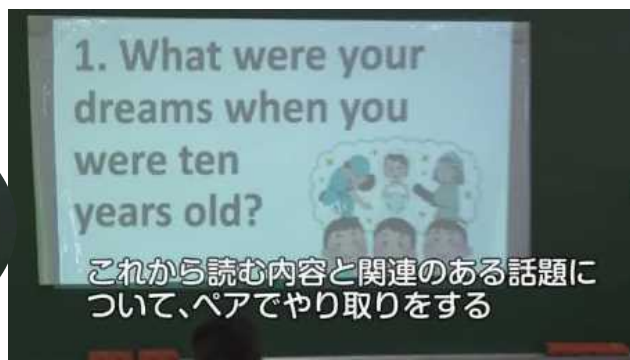
【第2学年】履修科目：「コミュニケーション英語Ⅱ」（4単位）及び「英語表現Ⅱ」（分割2単位）／主な教材：左記科目の教科書、教科書の内容に関連した別教材

話すこと		書くこと		聞くこと		読むこと	
学習到達目標	科目・評価	学習到達目標	科目・評価	学習到達目標	科目・評価	学習到達目標	科目・評価
<ul style="list-style-type: none"> <li>・聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合うなどして結論をまとめることができる。</li> <li>・英語の音声的な特徴や内容の展開などに注意しながら話すことができる。</li> <li>・説明や描写の表現を工夫して、相手に効果的に伝わるように話すことができる。</li> <li>・与えられた条件に合わせて、即興で</li> </ul>	<b>コミュ英Ⅱ</b> ・プレゼンテーション ・ディスカッション  <b>英語表現Ⅱ</b> ・プレゼンテーション ・ディスカッション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、まとまりのある文章を書くことができる。</li> <li>・論点や根拠などを明確にしながら書くことができる。</li> <li>・説明や描写の表現を工夫して、相手に効果的に伝わるように書くことができる。</li> </ul>	<b>コミュ英Ⅱ</b> ・ライティングテスト ・定期考査  <b>英語表現Ⅱ</b> ・エッセーライティング ・定期考査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどの概要をとらえることができる。</li> <li>・事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどの要点や詳細をとらえることができる。</li> <li>・英語の音声的な特徴や内容の展開などに注意しながら聞くことができる。</li> <li>・未知の語の意味を推測したり背景と</li> </ul>	<b>コミュ英Ⅱ</b> ・リスニングテスト ・定期考査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・説明、評論、物語、随筆などを速読して、概要をとらえることができる。</li> <li>・説明、評論、物語、随筆などを精読して、要点や詳細をとらえることができる。</li> <li>・説明、評論、物語、随筆などを、聞き手に伝わるように音読したり暗唱したりすることができる。</li> <li>・文章の構成を考えながら読むことができる。</li> <li>・図表との関連を考えながら読むこと</li> </ul>	<b>コミュ英Ⅱ</b> ・リーディングテスト ・音読テスト ・暗唱テスト ・定期考査



## 「話すこと」と「読むこと」を組み合わせることにより、目的を持って文章を読み、要点を捉える力を育てる

- 授業を通して「何ができるようになるか」目標を生徒と共有する
- 本時の言語活動に必要な表現を確認する
- 話題についての自分の考えを伝え合う



- テーマに関する文章(記事)を読んで要点を捉える
- 記事の内容に関して紹介しあう(やり取り)

「高等学校学習指導要領(平成30年度告示) 解説 外国語編 英語編」



YouTube MEXTchannel 外国語教育はこう変わる!





事前に読んだ内容を踏まえて、情報や考え、気持ちなどを理由や根拠とともに即興で話して伝え合う活動や、やり取りした内容を整理して発表したり、文章を書いたりして学びを深める

### 1 Role Play

#### 話すこと【やり取り】

ペアで教科書に出てくる登場人物のセリフを考えて、作者が伝えなかったメッセージを英語で確認する

Snoopy is not elegant, but he always makes me laugh!



No kidding! What a lovely dog! I envy you.

### 2 Mini Debate

#### 話すこと【やり取り】

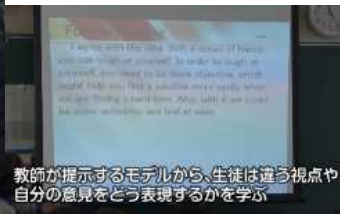
作者が伝えたいメッセージに対し、賛成・反対の立場に立って自分の意見などを英語で話して表現する

A sense of humor is the most important to be successful in life. Do you agree, or disagree?

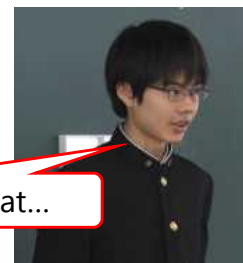
I disagree with this idea because....



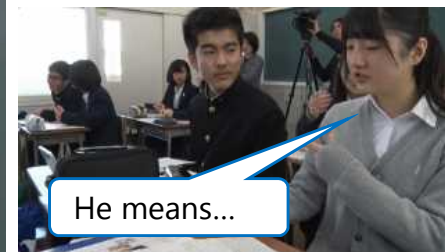
### 読んだことについて 自分の考えを深める活動



教師が提示するモデルから、生徒は違う視点や自分の意見をどう表現するかを学ぶ



I strongly believe that...



He means...

#### 書くこと

### 4 Wrap Up – Share Different Ideas

- ・他のクラスで出た違う視点からの意見等を英語で共有する
- ・振り返りを英語で書かせたりすることで学びを深める

### 3 Report

#### 話すこと【やり取り】【発表】

- ・聞き取った発表内容をペアで英語で確認する
- ・質疑応答や意見などを即興で話してやりとりをする

### 英語によるやり取りを継続・発展させるための教師の工夫

- ・使用する語句や文、やり取りの具体的な進め方を英語で事前に示す
- ・生徒の発話を違う英語の表現を使って言い換えるなどして、表現の幅を広げさせる
- ・生徒の考えを引き出す質問を投げかけて、英語で自分の考えを表現させる



「高等学校学習指導要領（平成30年度告示）」  
解説 外国語 英語編



YouTube MEXTchannel  
外国語教育はこう変わる！





# 英語教育の有識者による各種会議等における 大学入試（個別選抜試験）と高校教育に関する意見の例

## 学習指導要領の目指す方向性と大学入試（個別選抜試験）との整合性

- 学習指導要領は、翻訳や日本語による説明に偏った教育をしないように中学や高校の教育現場に求めているが、国立大学の2次試験は、多くの大学が翻訳や日本語の論述を中心とした問題を出題している。
- 指導要領に4技能教育が明記されているが完全に実現されていないのは大学受験のため。 大学受験はリーディングが80%以上。リスニングは2%以下、スピーキングはゼロ。リーディングの中には和訳、それから語彙問題、文法問題も入っている。ライティングの中には、英語に日本語を訳すという問題も入っている。先生方の努力はこの大学受験によって阻止されているのではないか。
- 英作文では、まず設問自体が（何を問うているのか）はっきりわからない。 ある表現や文法事項を使わせたいがために、英文が不自然なものがある。
- 大学によっては、さまざまな出題の工夫をしたり、まとまった量の論述を求めたりするなど、改善も見られるが、全体としては、まだまだ改善の余地がある。
- 一部の大学が行っている独特な英語のテストのための勉強をする一方で、資格・検定試験の勉強もするとすると無理だから、一本化するべきである。 一番大きな目標は留学生が減っている、実用英語になっていない、これをやっぱりゴールをしっかり適切なものにするによって変えていく必要がある。

## 英語教育の現状と高等学校の生徒や教職員の葛藤

- 高校に入ってくる生徒は、英語を話したいという気持ちは十分あると思うが、目の前の受験をどう乗り越えなければいけないかという切実な問題を、生徒、教員ともに抱えている。
- ある高等学校の高校1年生から、こんな手紙をもらった。「私は音声を中心とした勉強をしたいので、先生に授業でもっと音を使った指導をしてもらえようお願いします。」しかし先生は、全文和訳の授業しかしてくれません。先生は、国立大学の2次試験では和訳が出る。国立大学に行きたかったら、音を使った勉強よりも、和訳の勉強を一生懸命やりなさいと言いました。」このような偏った英語指導が、全国の進学校と呼ばれる学校でまかり通っている。
- ある大学では、主張の根拠がないなど、全く論理的でない日本語を英語に翻訳することを求めている。このような作文の訓練をすることで、どのような論理性が育ち、国際的になっていくのだろうか。私はこのような試験に対応するための授業はやりたくない。

- 高校の先生は文科省（学習指導要領）の方針と現実とのほさまに苦しんでいる場合がある。2年生までは英語で授業しているが、3年生になると急に日本語を使い出すといったようなことがある。
- ある高校の授業映像ですばらしいスピーチをする生徒を見て感動したが、その後ろには大学入試の過去問集が並んでいる。彼らはカメラがいなくなった後に、どんな勉強をしているのか。二つの価値観に挟まれて、子供たちも先生達も、苦しんでいる。
- 学習指導要領に合わない入試が高大接続を寸断している。
- もしスピーキングテストで、ある考えに賛成か、反対かを問うような、ディベートの問題であるとかスピーキングの課題に対して、論理的に人前でプレゼンテーションをする能力を問う入試になれば、試験の前日までディベートの授業ができ、試験前日までプレゼンテーションの授業ができる。
- 経団連でも、中学校の先生とか高校の先生に、今の教育改革についても何回かヒアリングしたことがあるが、やはりよく意見が出たのは、主体的・対話的な学びにしる、多様な体験活動の推進にしる、海外の学校との交流にしる、いろんなことをやりたいが、入試の前になるとちょっと（取り組みが進まなくなる）という話を本当によく聞いている。
- 研修や学習指導要領の説明を受けた教師は、がんばって授業改善に取り組んでいる。しかし阻害要因として、そうした先生が「この学校は受験中心なんだから、3年は教えなくていい」と言われる話などもある。

## 高大接続改革への期待

- 現行学習指導要領の下で授業は改善しつつあるが、旧来の訳読方式などの課題は一部に残っている。大学入試、教員の研修、教材など、各部分の議論だけでなく、横のつながりを見ながら、学校において一体感のある改革をしていく必要がある。
- 保護者は大学入試は知識の再生を一点刻みに問うものという感覚を持っていると思う。一点刻みだけでの子供の線引きではないのだと言うことを、学校教育に関わる者が発信していく必要がある。

(出典)

- 「英語教育の在り方に関する有識者会議」(平成26年) および「英語力の評価及び入試における外部試験活用に関する小委員会」(平成26年)
- 「英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」(平成26年～)
- 「中央教育審議会 教育課程部会 外国語教育ワーキンググループ」(平成27～28年)

※いずれの会議の議事録も、文部科学省ホームページで公開している。

# 關係資料②

## 4 技能評估關係

# 主な英語の資格・検定試験及び参加試験※

延期決定前に  
使用されていた資料

試験名	ケンブリッジ 英語検定		英検		GTEC		IELTS		IELTS	TEAP/ TEAP CBT	TOEFL iBT		
実施団体	ケンブリッジ大学 英語検定機構		公益財団法人 日本英語検定協会		ベネッセ コーポレーション		ブリティッシュ・カウンシル (公益財団法人)日本英語 検定協会		IDP:IELTS Australia 一般財団法人 JSAF	公益財団法人 日本英語検定協会	テスト作成: ETS 日本事務局: 一般社団法人CIEE 国際教育交換協議 会		
受検人数 (実績・国内)	非公表 ※全世界では約550万人		約366万人 ※英検Jr.、英検IBAを含む英検テストファミリー 総志願者数		約125万人		約3.7万人(2015年度実績) ※全世界では年間350万人		約8千人 ※全世界では 350万人	約2.5万人 ※志願者数	非公表		
回数 年間	各10-22回程 度、計206回 (2018年・世界 共通)	各2~4回	英検3回 CBT3回 (CBTは毎月実施だが、 検定回ごとに1回受験 可)	S-Interview、 1 day:各級2回 CBT:毎月実施	PBT 3回 CBT 3回	PBT 4回 CBT 2回	40回 (公開のみ)	29回 (公開の み)	約36回	各3回	40-45回	28回	
会場 数	最大 7地区 44会場	最大 10地区 47会場	公開会場230都市 400会場+準会場 (海外・離島含)17,000 会場	S-Interview、 1 day: 全都道府県約400会 場 CBT: 13都市約20会場	全都道府県 2,500会場 (CBT:85会場)	全都道府県 会場数未定 (CBT:70会場 程度)	23都道府 県 102 会場 (公開・団 体の合計)	10地区以 上 会場数未 定 2018年度 と同等を 目指す	11都道府県 約40会場	20都道府県 約60会場 (うちCBT約15 会場)	全都道府県 約90会場 (うちCBT11都道 府県以上、会場 数未定)	最大 10地区 78会場	会場数未 定
成績表 の 方法 (1)	CEFR・Cambridge Englishスケールスコア (80-230)・合格グレード		合否・英検CSEスコア (0- 3400)・ 英検バンド		スコア(0-1400)		CEFR・バンドスコア (1.0-9.0、0.5刻み)		CEFR・バンドスコ ア(1.0-9.0、0.5刻 み)	スコア(TEAP: 80-400、TEAP CBT:0- 800)・ CEFRバンド	スコア(0-120)		
出題 形式 (2)	L, R, W 紙/CB S ペア面接 (CB版もSは対面式)		L, R, W 紙 S 面接 (CBTは全てCBT)	L, R, W 紙 S 面接/CBT (CBTは全てCBT)	L, R, W 紙 S タブレット (CBTは全てPC)	L, R, W 紙 S 面接	L, R, W 紙 S 面接	L, R, W 紙 S 面接	L, R, W 紙 S 面接	L, R, W 紙(*5) S 面接 (CBTは全てCBT)	CBT		
受検料 (税 込・円)	C2 Proficiency 25,380 C1 Advanced 22,140 B2 First 19,980 B1 Preliminary 11,800 A2 Key 9,720 (*3)		1級: 8,400 準: 6,900 2級: 5,800(*4) 準: 5,200(*4) 3級: 3,800(*4) ※左側の欄は全て18年度実績に基づく 記載	1級: 16,500 準: 9,800 2級: 7,500 準: 6,900 3級: 5,800 ※右側の欄は全て17年度提出の申請書 に基づく記載	紙 5,870 (検定) CBT 9,720	紙 6,700 CBT 9,720	25,380	25,380	6,000 L/R 15,000 L/R/W/S	235米ドル			

※既存の資格・検定試験と「大学入試英語成績提供システム」参加試験とで違いがある場合、既存試験は左側、参加試験は右側の欄に情報を記載した。参加試験に関する情報は予定であり変更がありえる。  
 \*1全ての試験においてスコアを技能別に表示 \*2: L=Listening(聞く), S=Speaking(話す), R=Reading(読む), W=Writing(書く) \*3: 既存試験は実施試験センターにより異なることがあるが、参加試験はレベル毎に価格を統一する。  
 \*4: 準会場における受検料は400円引き \*5: TEAP、TEAP CBT共にL/Rのみでも受験可能 \*6: 開催月により異なる  
 ※ 実用英語技能検定における「英検2020 2days S-Interview」については、合理的配慮が必要な障害等のある受験者のみを対象としている。  
 ※TOEIC® Listening & Reading TestおよびTOEIC® Speaking & Writing Tests (一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会)は2019年7月2日に参加申込み取り下げを公表。

# 大学入試英語成績提供システム参加予定の資格・検定試験とCEFRとの対照表

文部科学省作成「各資格・検定試験とCEFRとの対照表（平成30年3月）」より令和元年7月作成

CEFR	ケンブリッジ 英語検定	実用英語技能検定 英検 CBT : 2級-3級 英検2020 1day S-CBT : 準1級-3級 英検2020 2days S-Interview : 1級-3級	GTEC Advanced Basic Core CBT	IELTS	TEAP	TEAP CBT	TOEFL iBT
<b>C2</b>	230   200			9.0   8.5			
<b>C1</b>	199   180	3299   2600	1400   1350	8.0   7.0	400   375	800	120   95
<b>B2</b>	179   160	2599   2300	1349   1190	6.5   5.5	374   309	795   600	94   72
<b>B1</b>	159   140	2299   1950	1189   960	5.0   4.0	308   225	595   420	71   42
<b>A2</b>	139   120	1949   1700	959   690		224   135	415   235	
<b>A1</b>	119   100	1699   1400	689   270				

▶ は各級合格スコア

※括弧内の数値は、各試験におけるCEFRとの対象関係として測定できる能力の範囲の上限と下限

- 表中の数値は各資格・検定試験の定める試験結果のスコアを指す。スコアの記載がない欄は、各資格・検定試験において当該欄に対応する能力を有していると認定できないことを意味する。
- ※ ケンブリッジ英語検定、実用英語技能検定及びGTECは複数の試験から構成されており、それぞれの試験がCEFRとの対照関係として測定できる能力の範囲が定められている。当該範囲を下回った場合にはCEFRの判定は行われず、当該範囲を上回った場合には当該範囲の上限に位置付けられているCEFRの判定が行われる。
- ※ 障害等のある受検生について、一部技能を免除する場合等があるが、そうした場合のCEFRとの対照関係については、各資格・検定試験実施主体において公表予定。
- ※ 実用英語技能検定における「英検2020 2days S-Interview」については、合理的配慮が必要な障害等のある受験者のみを対象としている。
- ※ TOEIC® Listening & Reading TestおよびTOEIC® Speaking & Writing Tests（一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会）は2019年7月2日に参加申込みを取り下げたため、記載していない。

# 資格・検定試験の内容（ライティング、スピーキング）

## 学習指導要領における内容等（書くこと、話すこと）

		「書くこと」	「話すこと」
コミュニケーション 英語Ⅰ	言語活動の内容	聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く。	聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて話し合ったり意見交換をしたりする
	配慮する事項	リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたり話したりすること。内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら読んだり書いたりすること。事実と意見などを区別して、理解したり伝えたりすること。	
コミュニケーション 英語Ⅱ	言語活動の内容	聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、まとまりのある文章を書く。	聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて話し合うなどして結論をまとめる。
	配慮する事項	論拠や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連などを考えながら読んだり書いたりすること。説明や描写の表現を工夫して相手に効果的に伝わるように話したり書いたりすること。	
英語表現Ⅰ	言語活動の内容	読み手や目的に応じて、簡潔に書く。	与えられた話題について、即興で話す。また、聞き手や目的に応じて完結に話す
	配慮する事項	リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら話すこと。内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら書くこと。また、書いた内容を読み返すこと。発表の仕方や発表のために必要な表現などを学習し、実際に活用すること。聞いたり読んだりした内容について、そこに示されている意見を他の意見と比較して共通点や相違点を整理したり、自分の考えをまとめたりすること。	

## 資格・検定試験における内容構成

	ライティング形式	ライティング内容等	スピーキング形式	スピーキング内容等
ケンブリッジ 英語検定 例： B1 Preliminary /for Schools	解答用紙 (リーディングと 合わせ90分)	○文変形問題(もう一つの文章と同じ意味になるように文章を完成させる問題) ○いくつかの情報を伝えるための短いメッセージを書く(35-45語程度) ○さらに長い文章を書くこと(物語か非公式の手紙のいずれか、2つの選択肢から1つ選んで約100語で書く)	面接 (面接官1人： 受検者2人) 10-12分	○試験官は受検者に「お互いを理解する」ための質問をする。 ○ある状況についてももう一人の受検者と会話する。 ○受検者は写真を見てさらに長い時間話すことが求められる。 ○同じテーマについて議論しながら、再びもう一人の受検者と意見を交わす。
実用英語技能 検定 例： 英検2020 1day S-CBT 2級	解答用紙 (リーディングと 合わせ85分)	○指定されたトピックについての英作文を書く。	PC録音 約7分	○60語程度のパッセージを音読する。 ○音読したパッセージの内容についての質問に答える。 ○3コマのイラストの展開を説明する。 ○ある事象・意見について自分の意見などを述べる。(カードのトピックに関連した内容) ○日常生活の一般的な事柄に関する自分の意見などを述べる。(カードのトピックに直接関連しない内容も含む)

	ライティング形式	ライティング内容等	スピーキング形式	スピーキング内容等
GTEC 例： GTEC CBT	キーボード 入力65分	<ul style="list-style-type: none"> <li>○与えられた英文と状況設定を読み、条件にあった内容を書く</li> <li>○与えられた状況設定を読み、条件にあったEメールを書く</li> <li>○統計データなどに対して、自分の意見やその意見の背景となる理由などを書く</li> <li>○与えられたトピックに対して、他者の考えなどを取り入れながら意見を展開する</li> </ul>	PC録音 20分	<ul style="list-style-type: none"> <li>○質問に対して即座にかつ適切に応答する問題</li> <li>○ウェブサイトなどから得た情報を整理して説明する問題や、自ら質問する問題</li> <li>○与えられたトピックに対して、自分の考えや経験に基づいて意見を述べる問題</li> <li>○他者の質問に対して即座に応答する問題</li> </ul>
IELTS (Academic Module)	解答用紙への 記入60分	<ul style="list-style-type: none"> <li>○図表やグラフの要約・説明・描写(150語以上)</li> <li>○エッセイ(250語以上)(問題や議論、見解について自身の意見を記述)</li> </ul>	面接 (1:1) 11-14分	<ul style="list-style-type: none"> <li>○家庭、仕事、勉学、興味など、自分自身のことや身近な話題について質問に答える</li> <li>○特定のトピックの記載されたカードが配られ、そのトピックについて話す。試験官はその話題について1~2つの質問をする。</li> <li>○前段の話題に関する概念的な意見や論点について更に議論する</li> </ul>
TEAP	解答用紙への 記入70分	<ul style="list-style-type: none"> <li>○論説記事などを読み、70語程度の要約を作成</li> <li>○数の情報源(図表を含む)から論点を読み取り、それらを統合したうえで自身の考えを200語程度で展開する</li> </ul>	面接 (1:1) 10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>○受験者自身のことについて説明する。</li> <li>○対話における効果的なやりとり(対話のリード)</li> <li>○与えられたテーマに関して、まとまりのあるスピーチをする。</li> <li>○与えられた話題に関する質問に答える。</li> </ul>
TEAP CBT	PC入力 50分	<ul style="list-style-type: none"> <li>○短いメッセージ(発信)(応答)を書く</li> <li>○大学での事務的な掲示物・配布物・メールなどを読み、それに対して文章を書く</li> <li>○図表に含まれる情報を理解して、要点を書く</li> <li>○アカデミックな文章を読み、講義を聞いて、それらを要約し、自分の意見を書く</li> </ul>	PC録音 30分	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分に関する短い質問に答える</li> <li>○大学生活で遭遇する場面で、口頭説明をしたり、メッセージを残したり、問い合わせをしたりする</li> <li>○文章を読み、それとは異なる内容を示すグラフ・表をみて、文章との矛盾点を指摘する</li> <li>○講義を要約する</li> <li>○講義の内容に関して自分の考えを述べる</li> </ul>
TOEFL iBT	PC入力 50分	<ul style="list-style-type: none"> <li>○リーディングやlisteningのタスクを基にエッセイ形式の答案を書く。意見を支持する文章を書く。</li> </ul>	PC録音 17分	<ul style="list-style-type: none"> <li>○身近なトピックについて意見を述べる。リーディングやlisteningの課題を基に話す。</li> </ul>

※学習指導要領の科目は、大学入試センター試験の出題科目である3科目を示した。

※資格・検定試験の内容構成に関しては、各試験団体の公表資料を基に文部科学省で編集(令和2年3月)。

各試験の出題形式・内容は変更されることがある。

※異なる試験に分かれているもののうち、ケンブリッジ英語検定・実用英語技能検定はCEFR B1相当の試験を例示。

GTECについてはGTEC CBTを例示。

関係資料③  
高校教育の現状等



# 英語教育改善のための取組

## 中学校・高等学校の生徒の英語力向上を支える取組

### ○国・地方公共団体・各学校のPDCAサイクルを実施

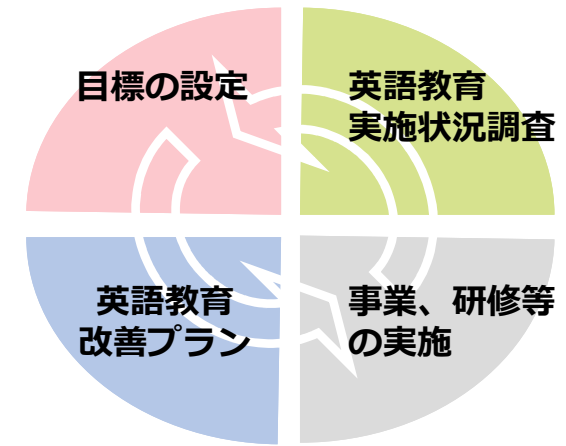
- ・国としての生徒の英語力の目標を設定（教育振興基本計画）
- ・各都道府県・指定都市に「英語教育改善プラン」の策定を要請
- ・文部科学省は各都道府県が「プラン」に基づき実施する取組を支援（「英語教育改善プラン推進事業」等）
- ・目標に対する到達度を調査、公表（英語教育実施状況調査）

### ○教員の養成・採用・研修を一体とした改善、指導体制の充実

- ・英語教育推進リーダー研修（H26-30）、オンライン・オフライン研修（H31-）
- ・養成課程や研修のための「外国語（英語）コアカリキュラム」の作成
- ・外国語指導助手の配置促進（JET-ALTプログラム）
- ・特別免許状や特別非常勤講師の活用

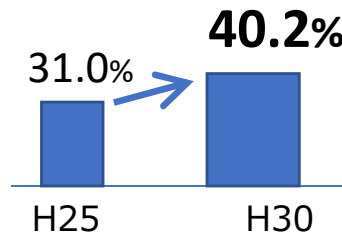
【第3期教育振興基本計画KPI】

中学卒業時にCEFR A1（英検三級程度）相当以上、  
高校卒業時にA2（準二級程度）の割合を5割以上とする

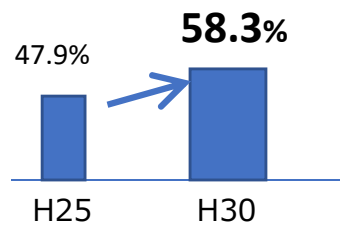


地方公共団体が実施する  
英語教育改善のPDCAを支援

## 高等学校の英語教育の改善状況

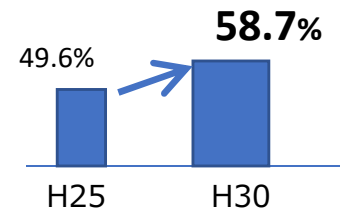


生徒の英語力  
CEFR A2以上

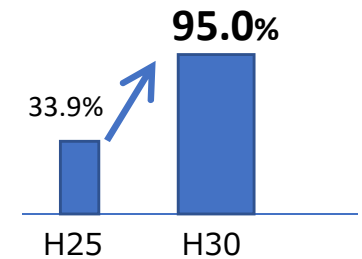


生徒の英語による  
言語活動の割合※  
(概ね(75%以上)・半分以上の割合)

※コミュニケーション英語Ⅰ・普通科



英語教師の  
英語使用状況※  
(概ね(75%以上)・半分以上の割合)



CAN-DOリスト形式の  
学習到達目標設定

(出典) 平成25年度及び平成30年度英語教育実施状況調査（文部科学省）より

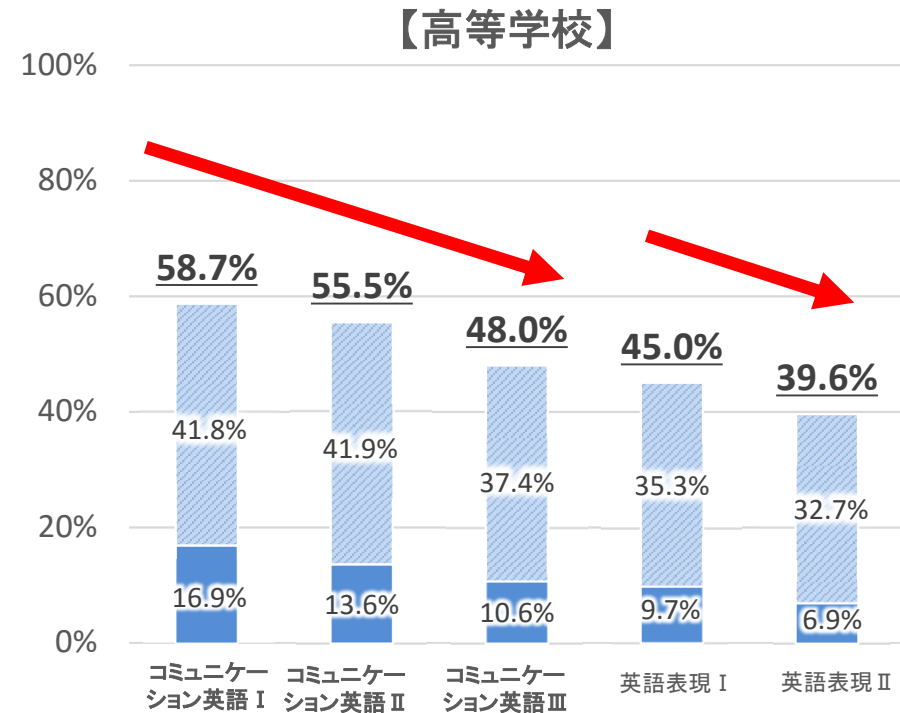
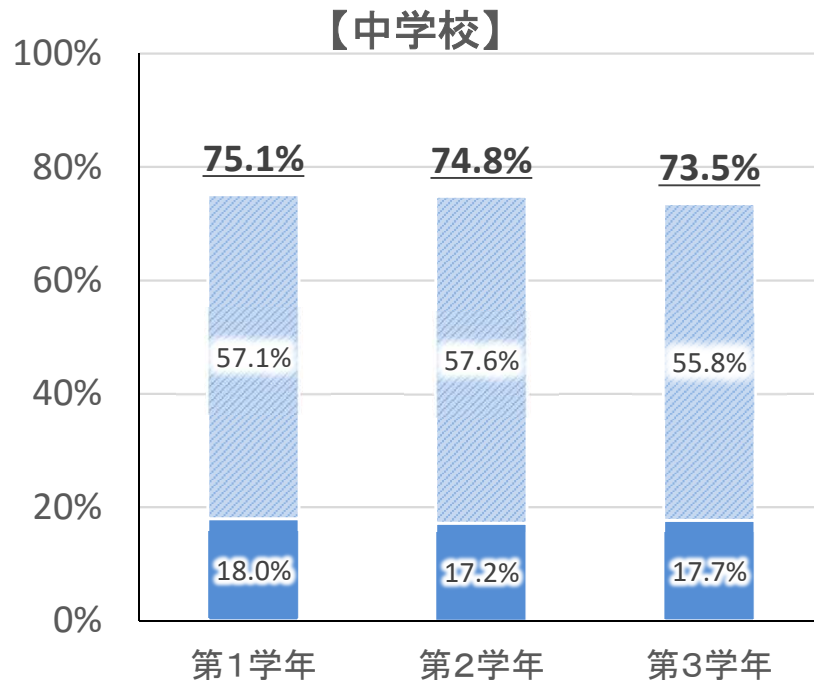
# 英語担当教師の英語使用状況

- ・新学習指導要領では、授業を英語を使った実際のコミュニケーションの場面とするため、中学校・高等学校ともに、「授業は英語で行うことを基本とする」としている。（現行学習指導要領では高等学校のみ明示）
- ・学年・学校段階が上がるにつれて教師の発話を「概ね」「半分以上」を英語で行っている割合は下がる傾向にあり、生徒の言語活動の状況（p 4）と同様の傾向。

（※参考）中学校学習指導要領第2章第9節 外国語3 指導計画の作成と内容の取扱い（1）指導計画の作成上の配慮

エ 生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるようにすること。

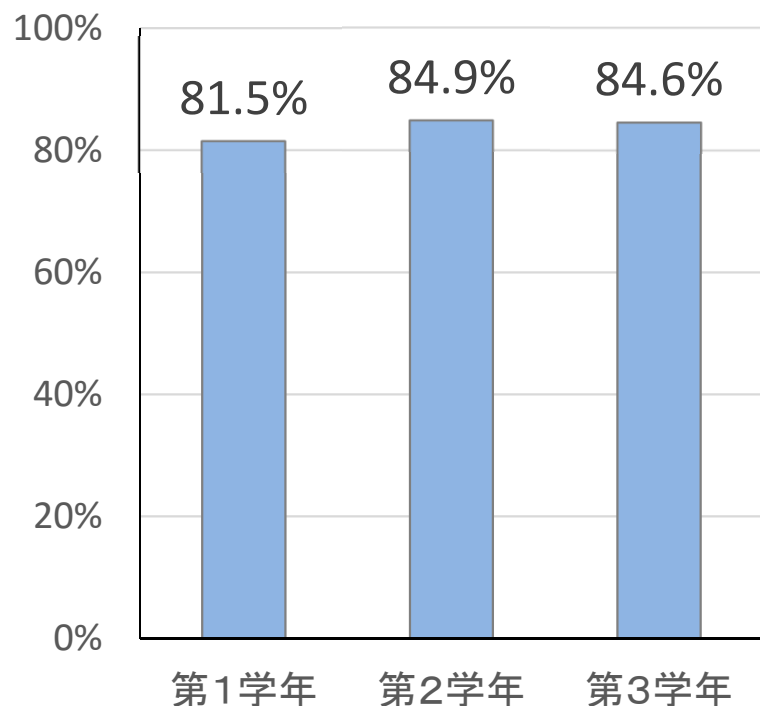
- 発話の半分以上を英語で行っている（50%程度以上～75%程度未満）
- 発話を概ね英語で行っている（75%程度以上）



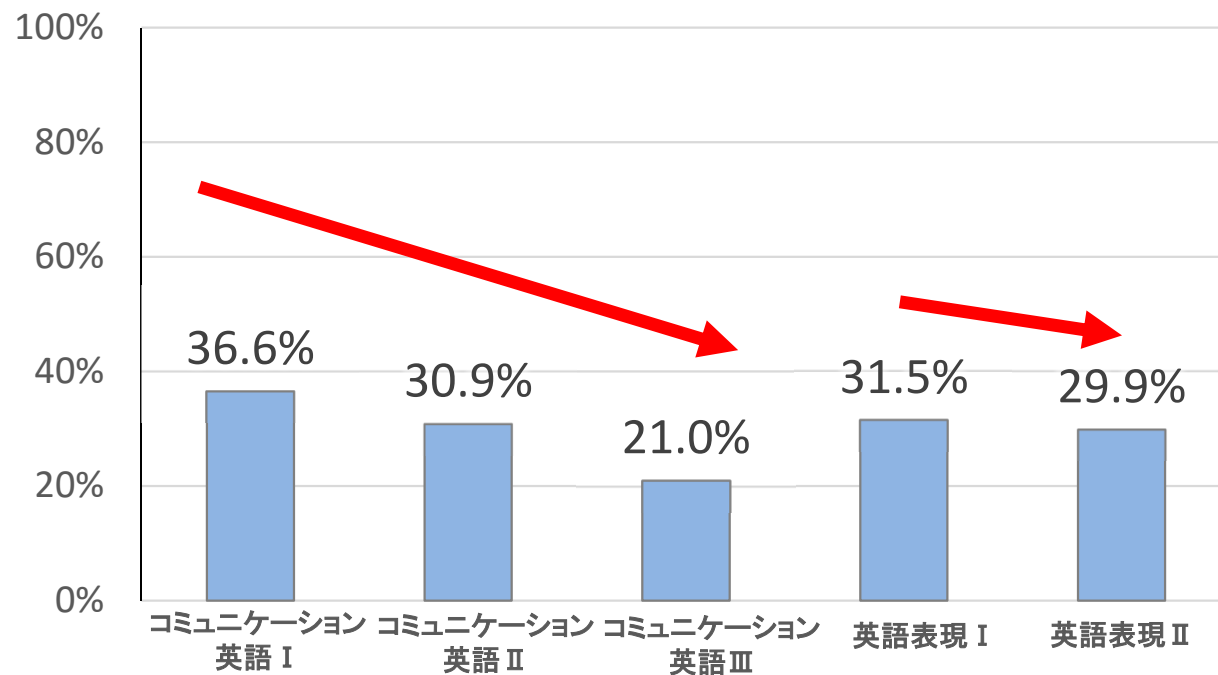
# パフォーマンステストの実施状況

- ・ 4技能のバランスのとれた育成、特に発信力の強化を図る上で不可欠な、「話すこと」「書くこと」のパフォーマンステストの実施状況は、中学校では8割強。高等学校※では、科目（学年）が進むにつれて実施状況が下がっている。
- ・ パフォーマンステストを実施している学校が多い都道府県ほど、生徒の英語力が高い。

【中学校】



【高等学校】



※普通科等の学科(普通科、その他の専門学科及び総合学科)のうち、「話すこと」及び「書くこと」両方のパフォーマンス評価を行っている割合

(出典)文部科学省「英語教育実施状況調査(平成30年度)」

## 生徒の英語力向上に向けた分析(中学校・高等学校)

以下のような授業改善に関する項目等の数値が高い都道府県・指定都市ほど、生徒の英語力に関する指標を満たしている割合が高い。

→生徒の英語力を高める上で、各都道府県・指定都市において、これらの取組の実施率を総合的に高めることが求められる。

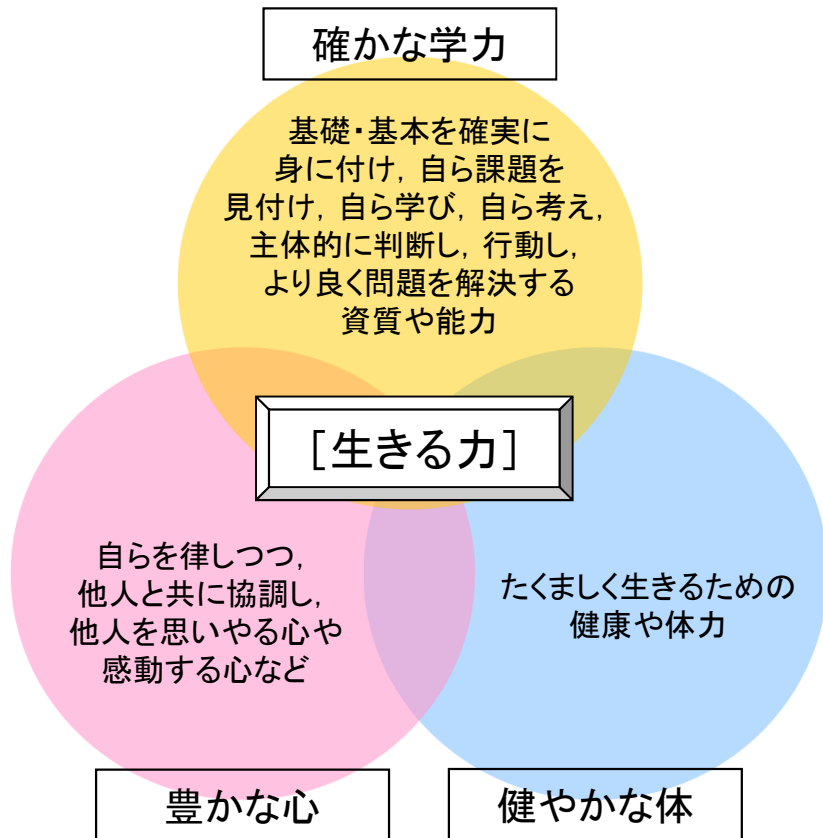
### ■生徒の英語力に関する指標と相関が見られる調査項目

中学生 (CEFR A1レベル(英検3級)相当以上)	高校生 (CEFR A2レベル(英検準2級)相当以上)
・小中連携の実施 (特に小中連携カリキュラム作成)	・ICTを活用している学科の割合
・教師が発話を概ね(75%以上)英語で行っている割合	・CEFR B2相当以上の資格を有する教師の割合
・授業の大半(75%以上)で生徒の言語活動を行っている割合	・ALTを活用した授業時数の割合
・話すこと・書くことのパフォーマンス評価の実施割合	・「話すこと」「書くこと」のパフォーマンステスト(評価)の実施割合
・ICTを「話すこと」の言語活動に活用している割合	・授業の半分以上で生徒の言語活動を行っている割合
等	・教師が発話の半分以上を英語で行っている割合
	等

(注)上段は項目間で正の相関( $r \geq 0.4$ )が見られた項目、  
下段は弱い正の相関( $0.4 > r \geq 0.2$ )が見られた主な項目について記載。

# 「生きる力」の確実な育成

## ◆現行学習指導要領の理念



教育基本法改正等を踏まえ、「ゆとり」か「詰め込み」かではなく、これからの社会において必要となる知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」をより効果的に育成

### ○ 学校教育法（昭和22年法律第26号）

#### 第30条（略）

- ② 前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

## 現行学習指導要領においても...

### 外国語

- ・4技能のバランスの取れた育成を重視
- ・英語で「聞く」「読む」「話す」「書く」といったコミュニケーションを中心とした授業にするため、高校では「授業は英語で行うことを基本とする」ことを規定

### 理科

- ・実験、観察を重視
- ・知識・技能を活用する学習や探究する学習を重視

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする  
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる  
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、  
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む

「社会に開かれた教育課程」の実現

各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

何を学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた  
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共」の  
新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造  
的に示す

学習内容の削減は行わない

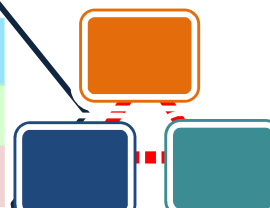
どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・  
ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習  
得など、新しい時代に求  
められる資質・能力を育成

知識の量を削減せず、質  
の高い理解を図るための  
学習過程の質的改善

主体的な学び  
対話的な学び  
深い学び



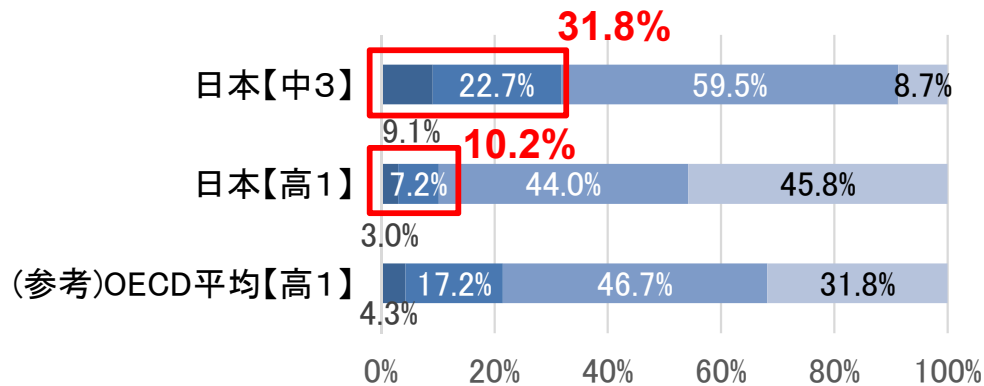
# 理科の観察・実験に関する状況

- 現行学習指導要領においては、理科の観察・実験、知識・技能を活用する学習や探究する学習を重視
- しかしながら、理科の観察・実験に関する指標は、中3から高1にかけて大幅に低下（高1はOECD平均よりも大幅に低い）

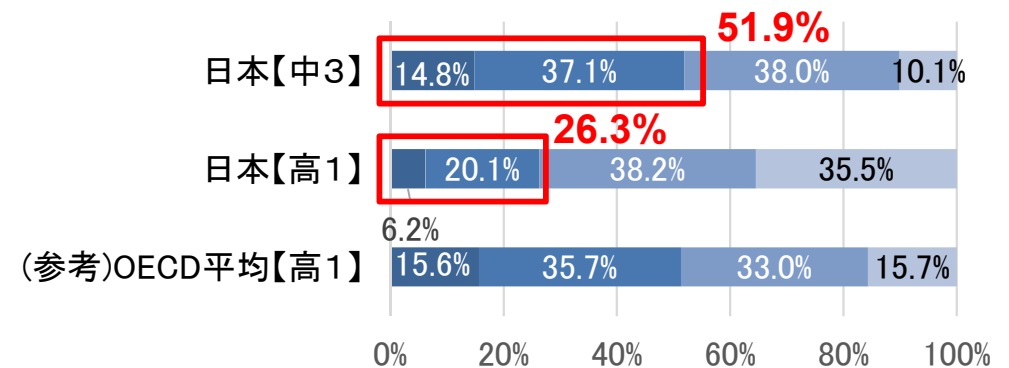
※フィンランドなど、他の上位国と比較しても低い状況。

※同様の設問が問われたPISA2015調査においては、若干の改善傾向は見られるものの、基本的に同様の状況。

## 「生徒が実験室で実験を行う」割合



## 「生徒は、実験したことからどんな結論が得られたかを考えるよう求められる」割合



- すべての授業である
- ほとんどの授業である
- いくつかの授業である
- ほとんどか全くない

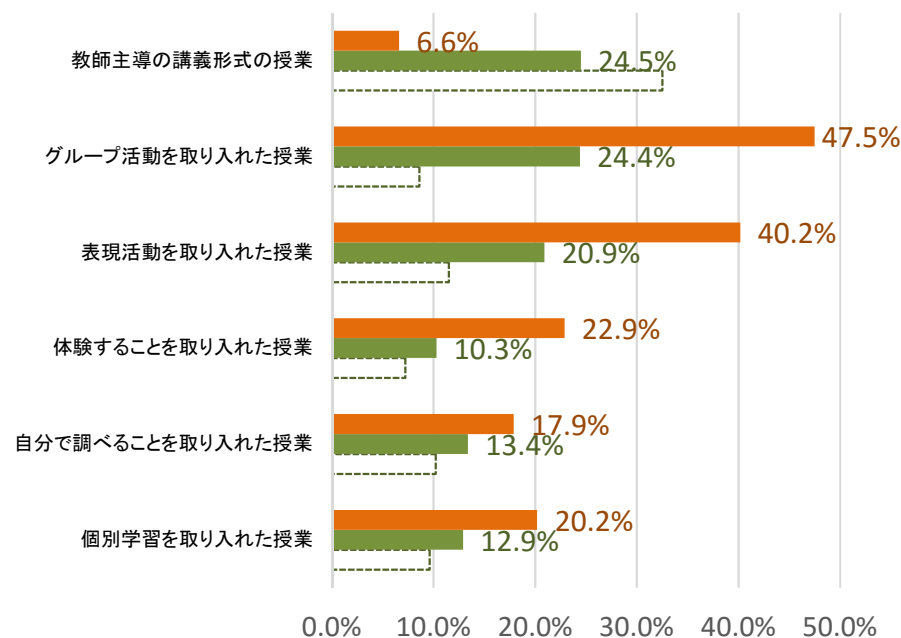
【出典】国立教育政策研究所「PISA調査のアンケート項目による中3調査」(2008)

※数値は、高1についてはPISA2006調査結果、中3については国立教育政策研究所が独自に調査したもの

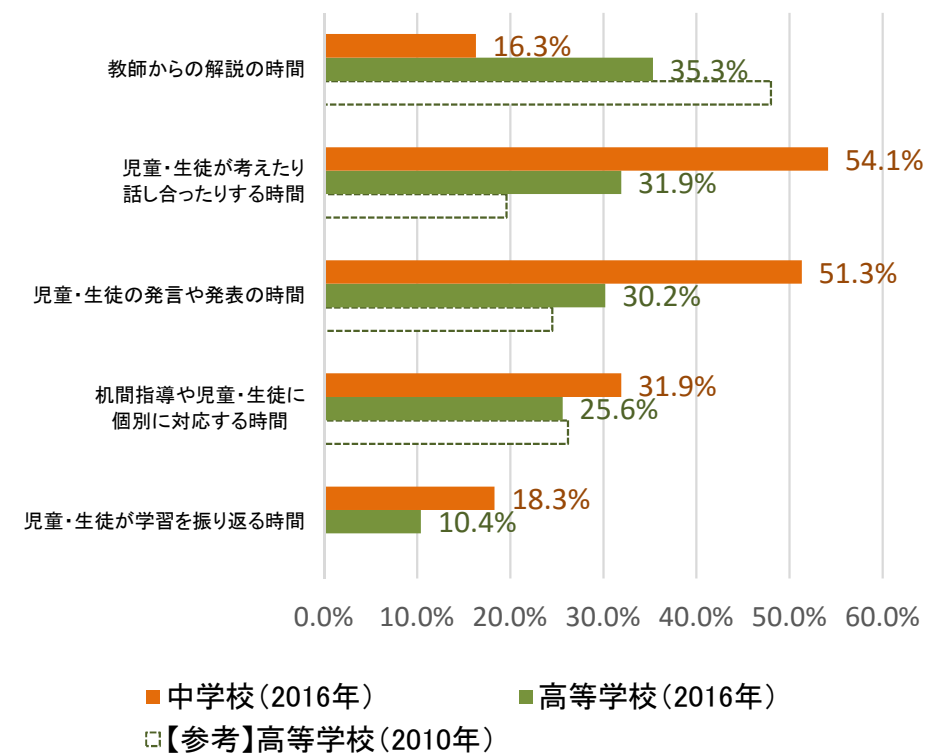
# 高等学校における指導の状況

- 中学校と比べて、高等学校においては、
  - ・「教師主導の講義形式の授業」が多く、「表現活動を取り入れた授業」や「自分で調べることを取り入れた授業」を多くしようとする意識が低い。
  - ・「教師からの解説の時間」が長く、「児童・生徒が考えたり話し合ったりする時間」や「児童・生徒の発言や発表の時間」を長くとうという意識が低い。
- 2010年調査と比べて改善されている傾向にあるが、依然として中学校と比べると不十分。

## 心がけている授業方法



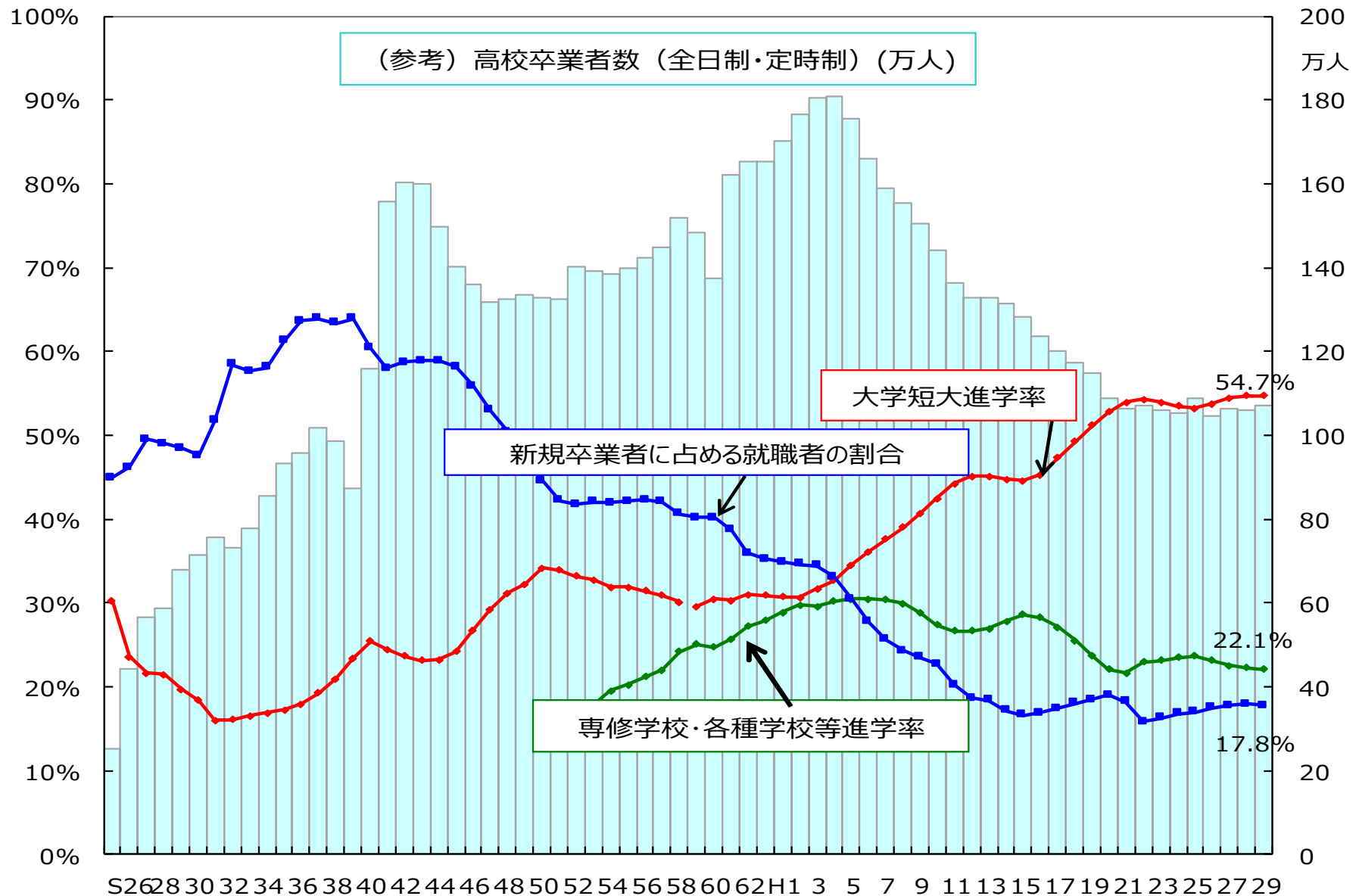
## 心がけている授業時間の使い方



※数字は、「多くするように特に心がけている」割合



# 高校生の卒業後の進路状況（推移）

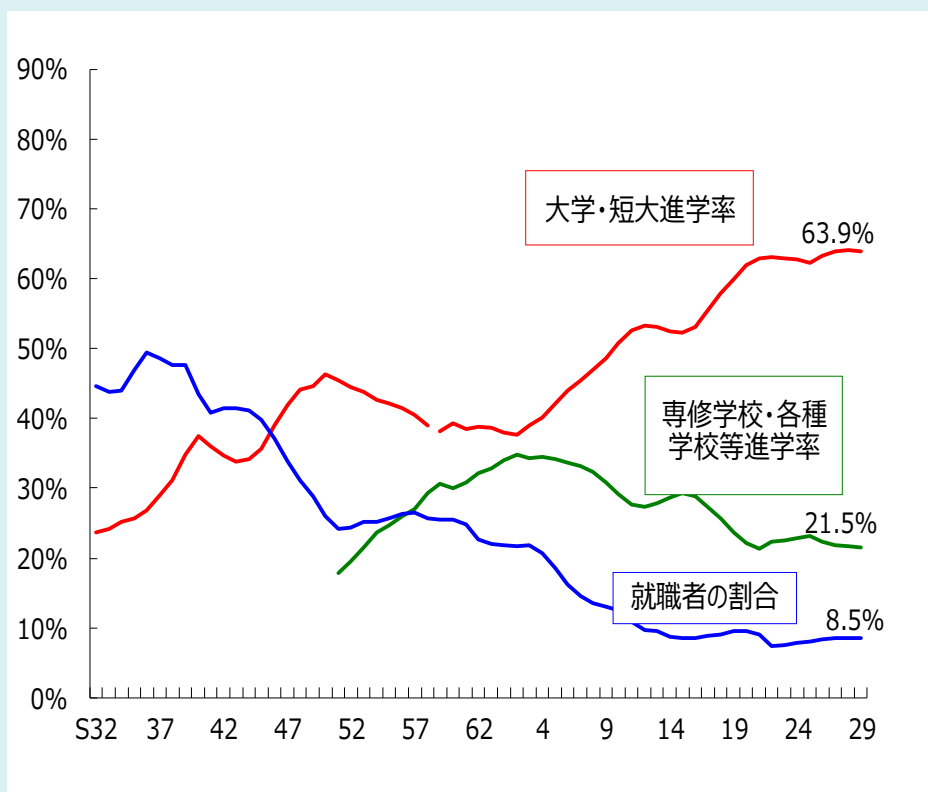


※ 「大学短大進学率」は、昭和58年度以前は通信制への進学を除いており、厳密には59年度以降と連続しない

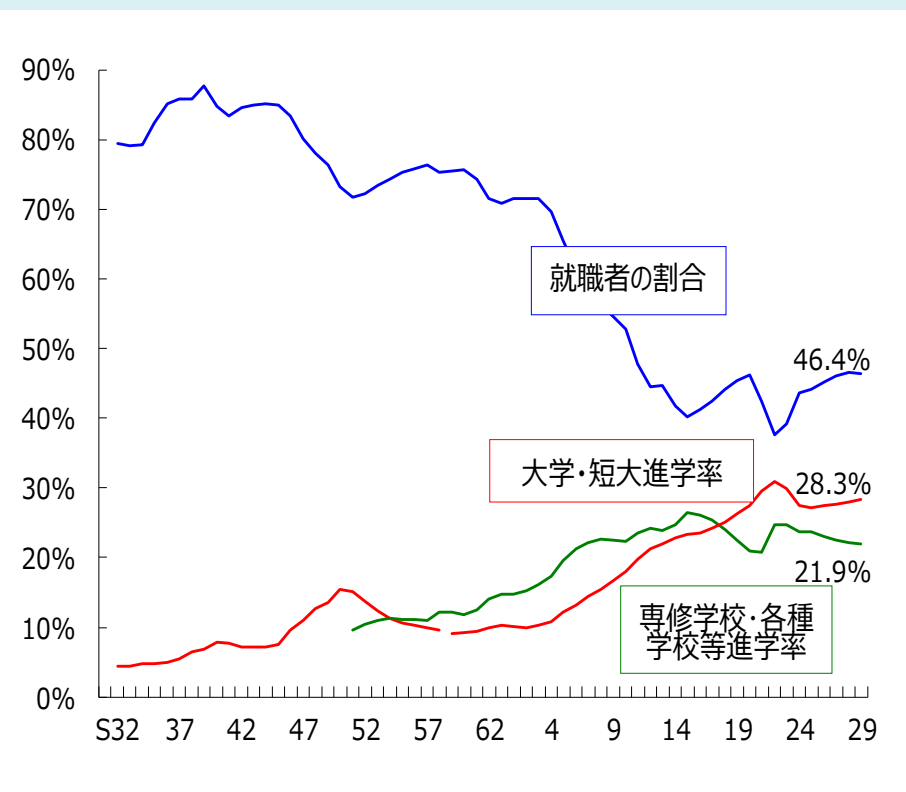
# 高校生の卒業後の進路状況（普通科・専門学科別）

- ここ数年の普通科卒業生の傾向を見ると、大学・短大進学率は約60%、就職者の割合は約10%で推移。
- 一方、専門学校・各種学校等進学率は低下。
- 専門学科卒業生は、就職する者が最も多く、就職者の割合、大学・短大進学率ともに上昇傾向。

## 普通科



## 専門学科



※ 大学短大進学率には、昭和58年以前は通信制大学短大への進学を除いているが、昭和59年以降はこれを含んでいる。